

2006年8月8日

テロ報道の発信と受信

グループ2

Introduction

私達はメディアを通して遠く離れた国で発生しているテロの存在を知ることができる。しかし同時に、報道によって偏見、誤った認識が生まれる場合もある。テロに対する偏見や誤った認識を生み出さないために、テロ報道の発信側と受信側はどうあるべきか。テロ報道の現状を分析し、考察していく。

1. テロ報道の現状——9. 11テロの報道を例に

● アメリカ

貿易センタービルの高層階から飛び降りる人々の映像、命乞いをするテロ犠牲者の証言の映像、斬首の様子細かい描写などをテレビは長期的に発信した。

→詳しすぎる描写や衝撃的な放映の繰り返しによって、人々の頭の中にその映像が焼きつき、トラウマとして心に残る。またテロの恐怖や冷酷さを過剰に認識してしまうようになる。

● 日本

* テロ発生直後の新聞報道の見出しから

◇パレスチナにおける反応

「パレスチナ自治区から歓喜の声も」(朝日、12日)

←パレスチナ自治区の人々全てがテロを歓迎している？

「歓喜一転、不安も パレスチナ」(朝日、13日)

←パレスチナ自治区が歓喜に包まれていると他の国々に思われることを不安視している人々もいる？

「アラファト議長 テロを非難」(毎日、12日)

←パレスチナ自治政府としてはテロに否定的？

◇イスラムによる犯行を想起させる記事

「続くイスラム過激派テロ」(毎日、12日)

←今回のテロもイスラム過激派による犯行？

「米国の痛みは幸せ」(毎日、13日/イスラマバード)

←イスラム教徒全てがテロを歓迎している？

見出しは一目見てその内容を印象付ける効果があるため、このような見出しは「テロリスト＝イスラム」を容易に読者にイメージさせてしまう。

⇒これらの報道から偏見や誤った認識が生まれる。

2. テロ報道

○ 誇大報道するメディアの意図

読者や視聴者の興味をそそる内容：ショッキングな出来事、悲劇、苦しみ

＝メディアの利益（読者層拡大、視聴率獲得）

○ テロリストのメディア利用

テロリストの目的

・テロ行為を見てほしい、聞いてほしい、恐がってほしい

—より広く社会へ脅威が伝達されること

・メディアを通じて自分達の主張をアピール

—自分達への支持や同情を得る

メディアの誇大報道によってテロリストがもくろんだとおりのテロの効果が発生

○ テロ報道の受信者

受信者は過激なテロ報道を期待する→メディアの報道内容に影響

⇒悪循環が生まれる。

3. 報道の発信者・受信者双方に対する提案

○ 発信者

・対話の場を設ける

様々な文化や宗教を背景に持つ人々やテロに対して異なる見解を持つ人々による対話の場を設けることによって、受信側が一方的な見解しか受け取ることができない報道を避け、

様々な視点を提供する。

(Ex. テロリストの属する宗教に対して、その宗教とテロの関連性を信じる人々と、それを完全に否定する人々による対話など)

- ・自らの報道を検証する

過激報道を続ければ続けるほど、受信者側の誤解は深まっていく一方である。メディアが今までの報道のやり方の問題点を自ら提起し、受信者に報道の落とし穴を知ってもらうことが打開策となりうる。

受信者の関心が、悲劇や苦しみなどの過剰報道から真実を正確に伝える報道に移る

→過激報道を続ける発信者が自らの報道スタンスを変更する

○ 受信者

- ・ 情報を安易に鵜呑みにしない。

→教育によって報道に対する批判的な視点を育む。

⇒これらの過程を通じて、悪循環を断つ。

4. 結論

- ・ 複数のメディアに目を通すことによって、対話で誤解・偏見をなくす。

- ・ メディア側の対策：自らの報道の検証、メディアが対話の場をもたせる。

-----参考文献-----

『テロ対策入門－偏在する危機への対処法』

テロ対策を考える会編 亜紀書房 2006年

朝日新聞2001年9月12日6・7面、13日6・7面

毎日新聞2001年9月12日2・3面、13日4・5面

グループメンバー：

藤井 佑香、郭 伝こう、井原 正太郎、板倉 嘉廣、川村 康恵、新田 真紀、齋藤 美徳、

嶋田 佳奈恵、山畑 紀子